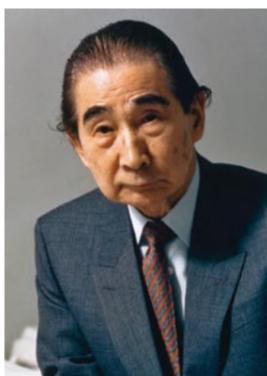


# 作家の肖像

## 第6回

このコーナーでは、  
毎回一人の作家を取り上げ、  
美術評論家の酒井忠康先生に、  
お話をうかがいます。



1913-2005  
丹下健三

たんげ・けんぞう  
1913年大阪府生まれ。建築家、  
東京大学教授。46年東京帝国  
大学大学院修了。戦後日本を代  
表する建築家・都市計画家とし  
て国内外で多くの作品を残す。  
80年に文化勲章、87年に建築  
界のノーベル賞といわれるプリ  
ツカー賞を受賞。主な作品に、  
国立屋内総合競技場、東京カテ  
ドラル聖マリア大聖堂、東京都  
新庁舎など。ユーゴスラビアの  
スコピエ再建都市計画、イタリ  
アのポローニャの都市計画など  
も手がける。91歳で死去。

## 時代のうねりとともに

丹下健三は生涯で300以上のプロジェクトに携わったといわれていますが、その中で私がいちばん好きなのは、やはり国立屋内総合競技場（現・国立代々木競技場）です。最初にこの建物を目にしたときは、その迫力に畏怖の念を抱き、心を震わせました。圧倒的な力で見ると迫る、すばらしい建築だと思います。

東京オリンピックの時期は、敗戦後、復興して立ち上がろうと、世の中全体にエネルギーがみなぎっていました。この競技場は、そのエネルギーのうねりを見事に形にした建築だと思います。このような建築物は、後にも先にもありません。時代とハーモナイズした「奇跡」のような作品だと私は思っています。

## 建築家としての資質

彼の著書『丹下健三 一本の鉛筆から』には、国立屋内総合競技場を設計する際に予算が足りず、当時の大蔵大臣・田中角栄に直談判したというエピソードがつつられています。このように、丹下は、対話をし、物事をうまく調整しながら遂行していく強い力をもっていました。

建築家というのは、アーティストと違い、その時代の社会的な条件をしっかりと満たさないと、作品を実現させることができません。また、多くの技術者の力を借りながら、共同で作り上げていかなければなりません。さまざましながらみや矛盾の中で、自己表現をしていくのが建築家といってもいいでしょう。丹下は、建築の他に都市計画なども手がけ、数々の大事業に関わっていましたが、

どんなに大きな仕事でも、見事に調整をつけて、やり遂げていきました。建築家としての類いまれな資質をもった人だったのです。

## 「富士山」のような存在

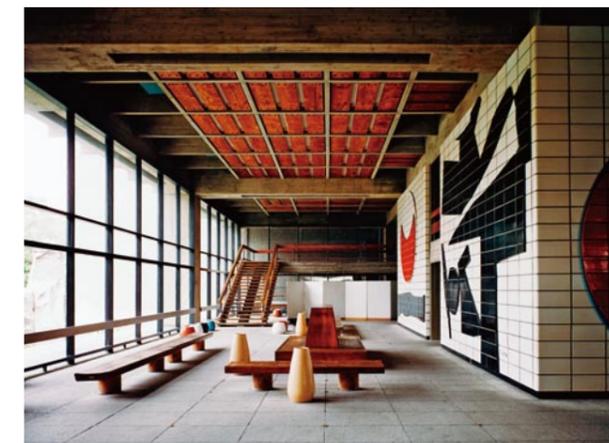
丹下は対話をし調整する能力にたけていた、と述べましたが、それは設計の手法にも表れています。彼は、トップダウンではなく、スタッフ全員に案を出させて議論を交わし、そこから出たアイデアを設計に生かしていく方法をとっていました。その結果、彼の研究室や事務所は、磯崎新、黒川紀章など優秀な建築家を多数輩出しました。

現在、日本の建築家は、世界でもトップクラスに位置していると思いますが、その礎を築いたのは、間違いなく丹下でしょう。彼は、日本の建築が世界から注目され、発展していく道筋をつくった、いわばパイオニアです。どの分野にも先駆者となる人はいますが、最初に世界に踏み出した人のもつエネルギーは、後世の人がどんなに努力してもなかなか超えることができないものです。

丹下は多くの建築家にとって「富士山」のような存在といえるかもしれません。皆、彼に憧れて目ざすけれど、決して超えることはできない。だから、別の次元で勝負をし、世界へ出ていく——丹下が後世の建築家に与えた影響は計り知れません。これからも変わらず、偉大な存在であり続けることでしょう。（談）

## 酒井 忠康

さかい・ただやす  
世田谷美術館館長、美術評論家。  
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。  
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。  
光村図書中学校『美術』代表著者。



上／国立屋内総合競技場（現・国立代々木競技場）外観 1964年  
つり橋と同じように高いマストから屋根をつり上げる「つり構造」を採用。  
それによりうねるような、芸術的な外観が生まれた。写真は第一体育館のスタンド部分。  
（撮影：アフロ）

左下／国立屋内総合競技場（現・国立代々木競技場）内観 1964年  
第一体育館の内部写真。「つり構造」によって生まれた迫力のある大空間。  
竣工当初はプールだったが、現在はバレーボールの試合などが行われる多目的競技場になっている。  
（撮影：アフロ）

右下／香川県庁舎 1958年  
日本の伝統的な建築様式を意識した設計。天井には垂木を思わせるコンクリートの小梁が見える。  
ロビーには、画家・猪熊弦一郎の陶板画が設置され、丹下の建築と美しく調和している。  
（撮影：新建築社写真部）